

ベートーヴェンがこよなく愛したフォルテピアノ

～今回使用する“ナネット・シュトライヒヤー”(ウィーン、1818年製)について～

渡邊 順生

2002年5月のある日、デパートで買い物をしていると携帯電話が鳴った。その時、もしこの電話に気がついていなかつたら、今回のコンサートもなかつたかも知れない。

というのは、電話の主はオーストリアに住む知人で、ナネット・シュトライヒヤーの1818年製のピアノが売りに出た、という話だったからである。

かつて私は、ヨーロッパでチェンバロやフォルテピアノなどの歴史的鍵盤楽器を研究するうちに、1810年頃から25年頃までのウィーンのピアノには、魅力的な楽器がおよそ少ないと感じた。18世紀の終わりから19世紀の初めにかけての南ドイツ／ウィーンのピアノは、いわゆる玉を転がすような軽快な音と弱音の表現力を特徴とし、このタイプにはシュタインやヴァルターをはじめとする名器が目白押しだ。

ところが、それに続く時代になると、ウィーンのピアノ製作家たちは力強いフォルテと繊細なピアノの両方を追い求めるようになるのだが、ほとんどの製作家が「二兎を追う」ことに失敗した、あるいは十分な成果を上げられなかつたのである。

そうした中で、ナネット・シュトライヒヤーのピアノは断然光り輝いていた。

私は、シュトゥットガルトやハレ、バーゼルなどの楽器博物館でこの時期のシュトライヒヤーのピアノを試奏したが、ベートーヴェンがぞっこん惚れ込んだのもむべなるかな、どれも「窮極のフォルテピアノ」とも言うべき名器であった。

しかし、シュトライヒヤーのピアノは、博物館には数多く並んではいても個人蔵のものは少なく、最近の取引例などは聞いたこともない、入手するのはほとんど不可能と諦めていた。

そこへ、この電話である。聞けば新発見の楽器で、状態も良好と云う。私が何と答えたかはご想像におまかせしよう。

ナネット・シュトライヒヤーは、1777年にモーツアルトが絶賛した南ドイツのピアノ製作家シュタインの娘であった。この時、彼女はまだ8歳、ピアノを達者に弾く愛らしい少女として、この時のモーツアルトの手紙に登場する。

彼女の結婚相手となったヨハン・アンドreas・シュトライヒヤーは、ドイツの「疾風怒濤運動」を担った詩人で、ピアノ奏者でもあった。彼はシュトゥットガルトの出身でシラーの友人でもあり、放浪時代のシラーを経済的に援助した。後年はベートーヴェンのために補聴器を作るなど、妻と共にこの不世出の楽聖の後半生を支える重要な友人となつた。

ナネットは1792年に父が死ぬと弟と共に工房を切り盛りしていたが、94年に結婚してウィーンへ出、短期間のうちにウィーンでも最も重要な製作家として不動の地位を築く。

1803年、フランスのエラールからピアノを贈られたベートーヴェンは、その力強いフォルテに大喜びしたものの、重いタッチと弱音が出ないことに辟易し、不満足な部分の改良をシュトライヒヤー夫妻に依頼する。シュトライヒヤーの工房ではエラールのピアノと大格闘した模様だが、結局出来ないことは出来ない相談なのであった。

しかし、この仕事を通じて、シュトライヒヤー夫妻とベートーヴェンの相互理解は大いに深まつたらしい。彼女は、1809年、新しいモデルを開発してベートーヴェンの要求に応える。この新型のピアノは、ベートーヴェンの考え方や要求を大幅に採り入れたという点で、広い意味で「ベートーヴェンとの共同開発」と言っても良い楽器であった。シュトライヒヤーは、1820年まで、基本的にモデル・エンジをせずにこのタイプのピアノを作り続けた。

